

トリブロムサランに係る食品健康影響評価に関する審議結果(案)についての意見・情報の募集結果について

1. 実施期間 令和4年12月14日～令和5年1月12日
2. 提出方法 インターネット、ファックス、郵送
3. 提出状況 2通
4. 頂いた意見・情報及び食品安全委員会の回答

	頂いた意見・情報	食品安全委員会の回答
1	<p>「遺伝毒性はないと判断した」とか「本成分が食品を介して人の健康に及ぼす影響を評価することはできないと判断した」とかありますが、結局、この成分はどういう扱いになるのでしょうか？</p>	<p>食品安全委員会は、国民の健康の保護が最も重要であるという基本的認識の下、規制や指導等のリスク管理を行う関係行政機関から独立して、科学的知見に基づき客観的かつ中立公正に食品に含まれる可能性のある危害要因が人の健康に与える影響について食品健康影響評価を行っています。</p>
2	<p>トリブロムサランの使用には反対である。内部寄生虫駆除剤には、ピチオノール、オキシクロザニド、ニトロキシニル、トリクラベンダゾール等の臭素を含まない薬剤があるが、それらを用いるべきであって、臭素を含む薬剤は臭素の環境中への拡散（特に農業用の水・土への拡散）が好ましくなく、またそもそも薬剤の製造・流通についても可能な限り減らすのが社会的にも望ましいものであるため、トリブロムサランの使用は終息させていくべきと考える。なるほど、試験においては生体にとって特段問題となる遺伝毒性はなかったとしても、それでも環境中への拡散は憂慮すべきものであり、内部寄生虫についての駆除のために臭素含有の薬剤を用いるのは、特段の事情でもない限り、行わないべき、通常の薬剤としての使用は行わないべきと考える。</p>	<p>本成分については、「暫定基準が設定された動物用医薬品及び飼料添加物に係る食品健康影響評価の考え方について」（令和2年5月18日動物用医薬品専門調査会及び令和2年6月15日肥料・飼料等専門調査会決定）に基づき評価を行ったものです。</p> <p>提出された資料等より、本成分は、遺伝毒性発がん物質であることを否定できるものの無毒性量（NOAEL）等を確認することができず、評価の考え方の3（4）に基づき、本成分が食品を介して人の健康に及ぼす影響を評価することはできないと判断しました。</p> <p>トリブロムサランは、暫定基準が設定された当時、海外の主要国での使用は確認されず、日本国内で動物用医薬品として使用されていたことをもって暫定基準値が設定されました。しかし、現在、日本国内において動物用医薬品としての承認はございません。</p> <p>本成分については、本評価結果及び既に国内承認がないこと等から、厚生労働省において食品衛生法の規格基準において基準値を削除し、個別に基準値が設定されていないものに適用される一律基準で管理する等の検討を行うものと聞いております。</p> <p>動物用医薬品の使用、残留基準に関するご意見は、リスク管理に係るものと考えられることから、リスク管理機関である厚生労働省及び農林水産省に情報提供いたします。</p>

※頂いたものをそのまま掲載しています。